歴史地理学　62－3（297）1-2　2020. 7

紙　碑

青木栄一先生のご逝去を悼む

在りし日の青木栄一先生
2000年TICCIH（イギリス）参加時のお姿
（御子息の青木亮氏ご提供）

青木栄一先生は，2020年5月4日の早朝に永眠された。享年87歳であった。

青木先生は，1968年のご入会以降，歴史地理学会の会員として，会員歴は50年以上にわたってご活動になられた。1977年度～2002年度の期間は評議員，1987年度～90年度および1993年度～99年度には常任委員（1993年度～95年度には編集委員会責任者のほか1996年度～98年度には常任委員長），さらに1990年度～93年度と1999年度～2002年度および2005年度～2007年度には会計監査を歴任されてるとともに，2002年度～2005年度の3年間には会長を務められた。

青木先生が，初めて歴史地理学会において発表されたのは，1968年4月5日に法政大学で開催された第11回大会であった。その内容は，『歴史地理学紀要』の第11巻（1996年7月）に，「第一次産業地域における局地鉄道の建設―地主金融資本の役割を中心として―」として掲載されている。その後第13回大会（1970年4月25日，立教高校）では，「戦後におけるイギリスの運河の変遷」の題目で発表されて，さらに第40回大会（1997年5月17日～19日，佐賀大学）においても発表されており，「歴史地理学の傾向と変容―掲載論文にみる歴史地理学の40年―」（40巻1号（通号187）1998年1月）として掲載されている。

また例会においても発表されており，第86回（1977年7月2日，大垣市文化会館）では「鉄道交通における歴史地理学の系譜と問題点」の題目で，第98回（1979年11月23日，専修大学）では「メソスケールの鉄道史について」，第103回（1980年11月29日，専修大学）においても「流山軽便鉄道の成立と生活」で発表されている。

青木先生は，都留文科大学の8年間（1965年4月～1974年3月）を皮切りに，防衛医科大学校に1年間（1974年4月～1975年3月），東京学芸大学に20年間（1975年4月～1996年3月），駿河台大学に8年間（1996年4月～2004年3月）奉職された。最も長く勤められた東京学芸大学においては，海外子女教育センター長（1990年4月～1993年3月），附属大泉中学校長兼同附属高等学校大泉校舎主事併任（1993年4月～1995年3月）を歴任された。

日本地理学会の50周年記念大会が専修大学の神田校舎において開催された時と記憶しているが，近くの喫茶店で故菊地利夫先生から「青木君，まだ汽車ポッポをやってるの」と尋ねられ，青木先生が苦笑いをされていたことが思い出される。ここで菊地先生が「青

木君」と声をお掛けにならたのは，青木先生が千葉大学（2年後に工学部から文理学部に転学部）に在学中に菊地先生をはじめ故清水馨八郎先生の薫陶を受けていたためであろう。青木先生のご専門が交通地理学（特に鉄道）や都市地理学であったことも，この時期に既に芽生えていたと推測される。

青木先生は，1952年7月の『鉄道ピクトリアル』（電気車研究会）に「東武急行編成近況」という論考を投稿されている。年譜からみれば大学入学前の時であるから，驚くべきことである。その後，青木先生には同誌に200本以上もの論説などがあり，青木先生がいわゆる鉄道ファンにとって，彼らの興味が鉄道会社別であろうが，対象が車両や切符であろうが「カリスマ的存在」であったことも肯ける。

もちろん，青木先生の興味・関心は鉄道のみに留まらない。青木先生は，1959年3月に東京教育大学大学院理学研究科（修士課程）において修士の学位を取得された。その論文名は「第二次大戦における船舶被害の分布について」であった。この論文は，その後『世界の艦船』23～28号（海人社）に「大西洋の戦い―生活海域と戦争の地理学的分析」（1959年7月～12月）として掲載された。この論説は，上・中の1～3・下の1～2と6回にわたって連載され，計49頁にも及んでいる。『鉄道ピクトリアル』，『鉄道ジャーナル』（鉄道ジャーナル社）といった鉄道関連の雑誌ばかりでなく，『世界の艦船』にも数多くの論説がある。このように，青木先生の目は船舶にも向けられていたのである。因みに，博士号の学位は「日本の私鉄における貨物輸送の地理学的研究」の題目で，1965年 3月に東京教育大学から理学博士を授与されている。主査になられたのは故青野壽郎先生であった。

青木先生の代表的単著として，『シーパワーの世界史①―海軍の誕生と帆走海軍の発達』（1992年）と『シーパワーの世界史②―蒸気力海軍の発達』（1993年，両書とも出版協同社）および『鉄道忌避伝説の謎―汽車が来た町，来なかった町』（2006年，吉川弘文館）がある。ある先生が「自分の背の高さほどの原稿を書け」とおっしゃっていたが，青木先生はご自分の背の高さを優に折り返しておられたのではないかと推測される。

1977年4月30日～5月2日広島大学において，歴史地理学会の20周年記念大会が開催された。大会2日目には，大学キャンパスから広島駅まで青木先生とともに歩いて帰った。その折，広島電鉄の車両をご覧になるたびに，青木先生は車両の写真を撮り，「この車両は以前，京都市内を走っていた」，「あの車両は，名古屋市内を走っていた」と全く関心のない私に熱心に説明して下さったことを，申し訳ない思い出と共に思います。その後，広島駅から呉線で帰路に就いた。その途中で車窓を眺めていた青木先生が，突然「君，5万を持っているかね」と尋ねられた。当時大学院生であった私は，（そんな大金を持っている筈がない，と思いながら）「ありません」と答えた。次に青木先生から発せられた言葉は，「じゃ，20万は？」であり，この時になって初めてお金ではなく地形図・地勢図のことであったのに気がついた次第であった。今になって考えれば，恥ずかしい限りである。

考えてみれば青木先生と筆者との関係は，都留文科大学時代には恩師として，東京学芸大学時代にはある意味で同僚として，1970年代から50年近くにも及んでいた。思い出は数多くある。また何かにつけて，多くの御教示と御指導をいただいていた訳である。最後に，5月6日に御自宅に伺わせていただき，「新型コロナウィルス」の時期にも拘わらず御子息に対応していただき，納棺された青木先生のご尊顔を拝することができた。これも何かのご縁と思い感謝している次第である。

青木栄一先生のご冥福をお祈りします。

「寛山常栄居士」，合掌。

（古田悦造）